

「現場主義」消防総合マガジン

月刊 消防

10

2011 October

シリーズ 東日本大震災⑤

現地消防本部に聞く! 発災から48時間

宮古地区広域行政組合消防本部 / 亘理地区行政事務組合消防本部

【新連載】連載講座・消防活動に有効な科学的トレーニング法 浜野学 / 協力:さいたま市消防局

【短期連載】消防法を読む 山口 徹

【短期連載】災害時の広報活動について 丸一功光

情報共有で組織力アップ! 消防式Moodle活用術 藤田 豊

できる消防士になる★ビジネススキル養成ゼミ 川口直子

木下先生によるわかりやすい法律解説 木下健治

<http://www.tokyo-horei.co.jp/magazine/shobo/>

f-s@tokyo-horei.co.jp



れた人々によって挙行され、テレビでも中継されました。陸前高田では何も無くなってしまうたまちの中心部に動く七夕飾りの山車が曳かれ全員が海に向かって黙禱しましたが、代表の方の「みなさん、見えますか？ 見えていますよね。聞こえていますか？」との呼び掛けは何とも切なくまた優しいものでした。家も流されどこに戻ったらよいか迷っている犠牲者の御霊は、我がふるさとの祭りの灯りに誘われて懐かしい地にやってくるのだとか。四つのまちが協力して2基だけの七夕飾りで「けんか七夕」を実施した地区では、

若者が「家を建ててもう一度この町に住みたいんだよお」と絶叫していました。ほとぼしる汗と光。天にもとどけと張り上げられる掛け声。お互いを気遣いながら結ばれる強い絆。東北各地の夏祭りは、亡くなった方の霊を弔い慰めると同時に、「私たちは必ずこのまちを再生させます！」との力強いメッセージのように思えました。

ふるさとがえりキックオフ

お盆の時期は夏休みの只中ということもあり、毎年多くの方がふるさとに帰省し日ごろの疲れを癒します。誰もがふと、子どもの頃やふるさとの暮らしを思い出すのはこの季節ではないでしょうか。都会に生まれ育った人にとっても、必ずどこかに「心のふるさと」

があるはず。それは特定のまちやむらではなく、遙か昔の懐かしい情景なのかもしれません。

「あなたにとって、ふるさととはなんですか？」と強く問いかける映画「ふるさとがえり」(林弘樹監督)の全国へのキックオフ上映会が6月27日、7月1日の両日、監督や出演者を迎えて東京都北区の北とびあ・つつじホールで開催されました。この映画は岐阜県恵那市の地域住民5万6000人を巻き込んで制作された、「映画づくりで絆を結ぶ」的な「心の合併プロジェクト」によるものです。合併して地域の意識は本当にひとつになったのだらうかと思いついたときに出会ったのが「市民参加型」の映画作りだったと、市職員の可知昌洋さんは公式パンフレットに心情を寄せています。6年半にもわたる活動は、「地域づくり総務大臣表彰 団体部門賞 (2010)」などを受賞しています。若き脚本家・栗山宗大氏は東京都北区生まれ。映画製作

に携わった「物語法人Fire Works」が北区十条に事務所を構えていることなどから、全国ロードショーに先駆け、我がふるさと北区での上映となったものです。

物語は、ある事情で都会からふるさとに戻った主人公の戸惑いながらのふるさとでの日々と、子どもの頃の思い出がオーバーラップしながら進行します。そして地域暮らしの要として登場するのが消防団です。心に清冽な涙が流れるような映画「ふるさとがえり」、機会があればぜひご覧いただきたいと思えます。

決して諦めることなく白球を追う球児のように、お互いに声を掛け合いながら明日に向かいたいものです。人恋しさがひとしお募る今年の夏でした。



映画「ふるさとがえり」のPRパンフレット



出演者を招いての「ふるさとがえり」上映会(北区北とびあにて)